
Big Sky High

サイルレン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B i g S k y H i g h

【Nコード】

N 4 4 9 0 Q

【作者名】

サイルレン

【あらすじ】

恋愛のテーマを中心に、シリアスなものから甘いものまで。暗くて歪んだ世界にも、愛しさは微かながら残っている……。もう少し、生きてみるのもいいなんて、口元に笑みを乗せて。

墮とされた天使

渦巻くは、
同情。

見も知らぬ笑みに覆われて、
鼻をつんと衝く匂いが襲う。
手放す意識の微睡眠を
第三者視点から見ているようだった。

背中が灼けるように疼くのは、
大きな羽が生えるからでしょ？
囚われの身も自らで、
飛んで切ってしまおうか。

だけでも現実には重かった。
手枷、足枷 皮膚を斬る。
ならば四肢を焼き尽くし、
嫌でもここから逃げちまおう。

頭の端で絶望と諦めが膨らんで、
この逃亡計画に霞がかかる。

触れる数多の手が熱く、
出ない声で世界に叫んだ。

温度が沈めば扉を垣間見る。
凍てついた射るような目に
背中の芯がぶるりと震える。
その姿は真の貴方、鬼の子のよう。

発せられる言葉は見えぬ壁に弾かれ
此処までは届かない。
けれど二度目のその眼差しは、
冷めた身体を包み温めた。

したり顔で此方に来て、
泣きそうな顔で抱き締めて、
嬉しそうな顔でキスをして、
そんな貴方はヘンな人。
小汚い堕とされた天使に恋するなんて。

弾かれた体温

空回り、声のトーンもただ下がり。
夢に飛び散った赤い雫は今もまだ
枯れることなく滴っている。

浮かんでは、沈んでく。

夢と現の合間で広がるおハナシ。
痛みの穴は徐々に大きく、
手の中の温度は急激に下がる。

「嫌だ、嘘だ」の叫び声も
フィルターに通した箒もり声。
体は操り人形で、心は枷を嵌められて。
「イヤだ、ウソだ」で満ちている。

目が回るような傷痕に
塩を塗り込む勢いで、
影の姿が浮かび上がる。
ああ、ソレはキット己の――ダ。

決られたものが描いた未来、
不思議な領きの本意など、
理解不能で怖いようなぐるぐるグルグル廻ってる。

「嫌だ、嘘だ」の金切り声が
虚空を切り裂きここまで届く。
同じ手口で引き合わせ、”幻であれ”と望ませる。
「イヤだ、ウソだ」で遮った。

足が重くて走れずに
それでも己を守ろうと、
振り上げた鋭い先端で。
ああ、コレはキット己が――ダ。

暫いの冬

今までちつとも見やらなかった季節、
不意に掠めた空気の匂いが
僕に笑みを浮かばせた。

告げられたさよならに、
幾ばくもない日々を捧げた。

真っ白なシーツは、
触れれば凍てついてしまいそうな程に
冷たく体温を奪った。

そこにあるはずの影がないのはどうしてだろうか。
小首を傾げながらも歩いてみる。

弱く、酷く不安な孤独の世界。
何も見えないと嘯^{うそぶ}いてきた。

本当は誰よりも分かってたじゃない、
誰よりも分かり易いから。

一緒に居た時間は見せ掛けという。
触れ合った温もりはフェイクという。
確かめた存在は空虚だという。
君は、

僕が遅刻をしたときのような諦め顔で
今も僕を見ているんだ。

幾度もない言葉の愛情表現。
視線を絡ませれば愛情表現にもなりうるのか、
そう言い聞かせながら逃れてきた。

目が沁みるのは青い空が眩しいから。
雪だつてチラつくこの季節に、
身体中が凍てつく外に佇む。
僕ばかり責める青い空を覆ったならば
羽根のような白いものを降らせ。
睨みきかせつ、僕は叫んだ。

歌でも、話でも、
光を引き留めればよかったのだ。
拙いこの気持ち、
あわよくば何も言わずにとしてきた。
それは違つと確信してたじゃないか。
何を因よすがとしよう、
この言いなりの声帯か。

良く見もせず_に過ごした季節を
今更だけで見渡してみた。
赤い淡い焰が燃えたのがいつなのか、
心に問うても限らない。
いきり立つ風に打たれの、
過去だけを見続けた。

美しさの欠片もないと思うものが、
君と居た方が色褪せる。
嘘で己を固めて守る。
咲かぬ花の蕾にそっと
誓いでも立ててみようか、たまには。

I d o n ' t w a n t o b s c u r e k i s s .

好きか、嫌いか。

それが分からないような曖昧なキスならいらない。

好きか、嫌いか、と言ったら
どちらかと言えば好きな方、
と答える。

自分が曖昧にその質問をかわすのは、
他でもないアンタの所為。
言えるなら言うよ、

「好き」くらい減るもんじゃないし。
だけどオレが溺れてたってアンタは気にしない。
オレはどうだっていいんだろ？

たまには心配かけたくなくて、
大雨の中飛び出してみる。
必ず迎えに来て、
優しく「帰ろ？」とか
(きつと心にもないことを)
言うもんだから、
もう一度許してしまう。

甘いつて分かってる。
だってその後は何もない、
甘さもないお座なりな空間。

少しくらいくっ付いてもいいじゃんか。
もったこつち見てよ、
そろそろオレだって辛いんだよ。

何も伝わらなくなつてから幾ら経つ？
「好き」も「愛してる」も
オレからの一方通行。
知ってた？

今では唯一の「俺も」すら少ないって。

このままで許されるなら、
オレは自分を犠牲にしたって良かった。
でもそうはいかないんだって、
氣付いちやつてさ。
1日が24時間で足りないなら、
オレの入る隙は無いね。

笑ったつもりなのに、笑えてなかったみたい。
「何でそんな顔すんの」が
頭の中に木霊する。
優しいなんて、暖色の目なんて、
辛いだけなのに。
思わず振り払えば、
物凄く傷付いた顔。
そんな表情^{カオ}しないでよ、
逆にコッチが苦しくなるから。

別れ際は何て言おうか。
何て言うだろうか。

オレなら「ありがとう」かな。
そう口から言葉が零れそうだ。
空調の止まった部屋、

この気まずさを打破するための言葉。
オレはありがとうって言った。

そのかつ開いた目を見て、
まだ終わっちゃいなかったんだなと。
その瞳の奥に感情見つけたら、
余計に決心揺らぐじゃない。
今追い討ちかけて言わないで。
開きかけた口に祈る。

言葉にしなきゃわからない。
でも今更言われても困る。
オレの頭ん中、それでぐちゃぐちゃ。

口は閉じたのに、手が伸びて。
無言の圧力、行くなって。
切なそうな笑顔は嫌いだ。

「……嫌いだ」「知ってる」
の攻防戦。

きつとアンタはオレが行けないと、
大いなる確信を得てして
そんな顔してるんだろう。
嘔吐きの癖に、嘔下手。

それで最後にアンタが折れて、

「ごめん、愛してる。」って囁いてくれる。
だから、もう少しくらい良いかなって
思っちゃうんだ。

この稚拙なレンアイを繰り返しても。
そうして5年が過ぎていた。

ねえ、曖昧な口付けはいらない。
好きか、嫌いかハッキリさせて。
そしてオレに、
甘い愛を騙って？

I d o n ' t w a n t o b s c u r e k i s s . (後書き)

BLなのではなく、俺女。

l o n e l i n e s

自由なんてない、

その気持ちを共有して安心感を得ていたのに、
結局はおれを置いて行くの？

暗い鳥籠にそれぞれ居た。

存在なんて薄っぺらいもので、

ソレを証明するものなんか無くて。

今にも消えて忘れ去られてしまいそうな
そんな自分。

必死で自分を求めてくれる人を探して、
ようやく見つけた二人。

おれは嬉しかった、

自分と同じ境遇だからこそ安心出来た。

誰にもバレないように、

おれたちはこっそり逢った。

きつと端から見たら、

只の仲の良い幼なじみに見えただかな。
おれたちはそんな間柄を望んでいた。
そんなんじゃないから。

相手の話を聞いて、

同情して、
笑って、
泣いて、
怒って。
何でもかんでも共有させた。
「おれのはお前らのもの」
そんな優しい三角関係。

だけどね、きつと心の中では
偽りだっておれは知っていたんだ。
おれは全て偽ってたんだ。
その方がみんなが幸せになれるから。
結局独り善がりな勘違いだったけど。

自分自身を騙し続けた。
この正体を気付かないフリをしてた。
あくまで仲間だと思い込んだ。
それは脆い殻でしかなかった。
あの日に、いとも簡単に崩れるくらい。

おれは独りに変わりはなかった。
一生変わらない事実、
それなら表向きだって事実のままが良いのかもしれない。
孤独を二人に伝えないようにして、
一人で世界を呪った。

いつだって三人で居た。
誰かを二人で庇い、守った。

そして互いを支えあつた。

世界はこんなにも鮮やかに見えた。

きつと、他の二人にとっては

現実だつたらう。

初めは間をおれが取り持っていた二人。

いつからか、おれは一步後ろから見つめている立場になった。

二人の中に入れなくなつてたんだ。

あれだけ一緒に居ようつて言つてたのにね。

おれの口角は綺麗に三日月を描いた。

月日は冷たく流れていき、

三角関係はいつしか収まりの良い形に変わっていた。

おれは笑つて送り出した。

「アンタらには鳥籠は似合わない」

手を振っている姿が滲んだのは何故？

素直になれ、と自分でも思う。

でもついた嘘は最後まで突き通して。

恨めないのは、それだけ大事だったからかな。

今でもそれは変わらない。

嫌な役を買つて出たのは、それだけ大切だったからかな。

そうに決まつてる。

届くか届かないかの距離で溜め息に乗せた「愛してた」は、
今まで見たことないくらいの白い雪に溶け混ざった。

約束シタノニ、マタ独リ。

侵蝕

まだもう少し。

あともう少し。

夕風の空まで届け、

風が吹き上げる。

赤い飛沫も吹き上げる。

あんな鮮やかな青が染まっていくな、
僕はじっと見ていた。

口癖も変わっているくらいに
とうの昔の話。

それでも気持ちは変わってないんだな、
って僕はくすつと笑った。

嘘の塊を優しさで包んで吐き出して、
有り得ないくらいの甘さに喜んだ。
それが本当は幸せだったんですなんて、
言えるわけないだろう。

この身体から溢れるモノは全て
紺の深い色の海に沈めばいい。
僕の作り上げた物語はもう必要ない。
届ける人がいないから。

なのに、どうしてかな。
色褪せた物語も良いなんて
思ってしまうなんてさ。

赤い空は黒に侵蝕されていく。
血飛沫のような空も太陽も
あつという間に消される。
星が見えたって、
身体が沈む感覚は衰えない。
この際届けばいいのにね。
君の居る場所まで。

空気の揺れで全て飲み込め？
馬鹿馬鹿しいような要求も、
出来るようになってしまふから許した。
傍にいただけで、
それは言わないつもりだったのに。

互いが言えない言葉は、
温もりと空気が伝えてくれた。
下らないプライドが歪んだ間を作った。
それでも良かったんでしよう？
本来ならこのまま行けたんでしよう？

黒い空が別の色に侵蝕されて、
エデンのような世界が見えるなら

届く気がするんだ。

「まだ」と「もう少し」で形成された
僕だけの世界。

君と交わる軌道に乗るまであと少し。

まだもう少し、

あともう少し、

侵蝕された夕風の空まで届け、
届け。

メトロポリタン

大波に吞まれた。

人混みは無情にも流れてゆく。

流されるままでいた。

このままだこまでも流されればいい。

黒の無い世界を目の当たりにすれば、

私は全てを失った。

泣き疲れても

涙は枯れないらしい。

笑い声がただ、こびり付いている。

何故光も闇も見えない世界で、

人々は歩けるのだろうか。

私は首を傾げながら佇んでいた。

失う方が辛いのか。

忘れる方が辛いのか。

忘れられる方が辛いのか。

伸ばした手が掴んだ答えはどれでも無いのだけど。

きつと私は忘れられることが辛い。

それはイコール失うこと。

本当の別れは、

「さようなら」なんて必要ない。
言うことなど出来ない。

そして貴方の存在が消える。

黒の無い世界で、

私はどう生きれば良い？

光を吸い込む黒を、

白を作り出す黒を、

手放した私はどうすれば良い？

乱れた心に拍車がかかる。

押し潰されそうな苦しみに耐えられるかしら？

下手くそな笑顔作って言ってみる。

そうすれば貴方は笑って

戻ってきてくれるだろうか？

……なんて、本当は思っちゃいけないのに。
現実なんて見たくない。

いつそ私も、だなんて思ったり思わなかったり。

「勝手に殺すなよ」の言葉を待つて、

私は思い出も綺麗にしまつてある。

直ぐに取り出せる場所に。

輝く宝石箱のような思い出のケース。

埃を被らないうちに早く開けさせて？

柔らかい声も、優しい目つきも、
もう一度、と繰り返す。

回したオルゴールは人の雑音に掻き消されて。
ぶつかった衝撃で取り落としてしまえば
最後。

嗚呼、次のお別れは
ちゃんと「さよなら」言えるように。

人はまだ流れてゆく。
足音は騒音でしかなく、
影は忽ちに変わり、
時間と共に去って、
運命と共に散ってゆく。

大都会の心音。
大都会の正夢。

c o d e

失ってから気付く、
そんな僕はガキですか？

一瞬だけ見たその夢に
色も温もりもあつたなんて言わないけれど、
手に残った感触は
本物だと信じたい。

信じれば真実になると言うのならば、
いつかその夢が本当になりますようにと
願わざるにはられない。

懐かしさも怖さも嬉しさも
全てを兼ね備えた夢。
それに出てきたキミは
一体どのキミ？

突然流れたある音に、
大好きな唄を重ねて。
傍にいる影に、
大切な人を重ねて。
心の海の奥底に

本当の気持ちを押込んで、
さも逆かのようにおちゃらけてみせる。
触れた手は見えない角度で。
何でもないです、と抱き付いてみせる。

わたしが望んだ結末じゃなくて、
むしろ避けたい結末であって、
あれが夢だと知らされても、
この余韻に浸りたい。

未だ遠くで唄は続いている。
同じように夢も続くだろうか。

もう一度^{ひとたび}目を閉じてみる。
鮮やかな音があればいい、
鮮やかなキミも居ればいい。
美しい唄を紡ぐ口が開く前に、
その夢は終わってしまうのだけれど。

失う前に、その手で抱き締めて。
別れる前に、その手で捕まえて。
わたしが離れた右手を
もう一度握り返して。
そうすればもしかすると、
またキミに会えるかもしれないでしょ？

信じれば信じるだけ

キミが傍に居る気がしてくる。

だから、もう少しだけ、

信じてみてもいいですか？

今度見るその夢に、

色も温もりもあるといい。

そんなことを願う僕は

世間知らずのガキですか？

c o d e | " g u i l t y "

紫の陽の花

手折った紫陽花が、
泣いていた。

人気の少ない道で僕はキミを見つけた。
今にも消えそうな姿が
今でも鮮明に思い出せる。
何を思ったか僕は、
キミに真っ黒な傘を差し出した。

キミはまるで花が咲くかのように
綺麗に笑う。
その紫色の服も、
白い肌も、
柔らかくなびく髪も、
零れそうな大きい瞳も、
全て輝いて見えた。

その姿の儚さに
目を擦って存在を確かめて。
「ありがとう。」と、
澄んだ鈴の音のような声がして、
僕は酷く安心したんだ。

淡い街灯が映し出す、
名も無きキミと
名乗る価値も無い僕。
冷たい雨の下でただ
傍にいたただけだったけれど、
それが心地良かった。

不意に裾を掴む手が
微かに震えるのを見た。
抱き寄せれば冷たさが襲う。
体が雨か、はたまた涙か。
僕の体温を移すようにと近付いた。

雨は止まないだろうか、
早くキミを暖かい家で温めてあげたいのに。
紫の花だって寒い中待ってるだろうに。
雨宿りしながら空に願った。

問い掛けは届いたか、
一瞬和らぐその内に
僕はキミを連れて駆け出した。
ぬくい部屋はたちまちに冷え、
僕は暖房をつける。

振り返ればキミは
紫の花を弄っていた。
「これ、どこで見つけた？」
透明な声が響く。

「折れてたけど、綺麗だったから拾ってきた」
そう返せば笑って、

「ありがとう」と言う。

けれどその裏に、何も聞くな が隠れていて、
少しだけ室温が下がった気がした。

結局僕は

キミを知らない。

だけでもキミは、

その程良い紫の花に似てる気がした。

——その先も、その前も

少しでも知っていれば、

もう少し傍にいらただろうか。

目を閉じてても、ほら、

何てことないかのように

その笑顔が浮かんでくる。

（夕立のボク と 紫陽花のキミ）

稚拙な空

レンズを向けても
僕はそのシャッターを切れなかった。

青く澄み渡っている空が、
心を驚掴みにするなんて
昔から分かっていたけれど。
僕はその空に貴方を重ねていたなんて
貴方は思うはずもないでしょう。

そしてただ、
僕がシャッターを切る瞬間を
優しい顔で見つめているんですね。

僕がどんな思いで
レンズ越しの歪み無い空を
自分のものにしようだなんて。

稚拙なデジカメじゃ
貴方の空は映せない。
でも稚拙なレンズで撮し続けた。

けれど貴方と同じなんて無かった。

貴方の空は貴方だけのものだった。
それを否定するかのように、
僕は写真を撮り続けた。

その笑顔が徐々に哀しげに歪んでも、
僕はそれを止めさせる術なんてなく、
代わりに変わり行く空の表情を留めさせる。

景色のどこをとっても綺麗だと思う。
貴方もそうだと笑っていましたね。
その一つ一つから貴方が浮かび上がってくるのです。
でも、僕はシャッターを切れなかった。

綺麗だと思うほど、
貴方を重ねるほど、
写真のような小さい面には収められそうに無かった。

映せば、貴方の見た景色と分からなくなってしまうから。

淡い太陽を僕は隠してしまう。
今日は雲の無い日だった。
やはり雲の僕は傍に居られない
そう実感したから。

一度だけでいい、
貴方の見た世界を僕に見させて下さい。
その夢を、
その空を。

カメラを持つ右手を下ろして、
貴方に向けた。

一度たりとも無い被写体。
冬晴れの空の下
眉を潜めて見上げる姿に、
気付かれないように
シャッターを切った。

景色は撮れない。
人の心も撮れない。
思い出になり得る朧気な姿だけれど
僕は稚拙な空と貴方を
閉じ込めた。

W e i ß N e b e l

オレの嘘と偽りの世界に堕ちてゆけ。

最期まで仮面^{ベルソナ}を被って踊ってみせましょう

……道化師^{クラウン}として。

果たしてオレは

W e i ß か

S c h w a r z か

どちらの色の衣装が似合いますか？

さあ、手を取って踊りましょう。

笑ってみせましょう。

楽しいショウの始まりですから、

極上に楽しませましょう。

只の道化芝居を現実。

白を纏った謎の道化師として、永遠に。

ああ、誰としてオレの本当の姿を知る者は居ないのだ。

全ての者が一生オレの嘘に騙されて生きる。

Weiß Nebel?? 白い霧

名も無き旅人、名も無き唄

宛てもない旅に行く、
ただ果てしない空の下を。

一步一步、踏みしめるように進む。

飛び去るような景色に、旅人は目を細めた。

見つからない未来を探すより、傍に寄り添う過去の方が良いのだろうか？

一步一步、踏み出すたびに問いを繰り返す。例えそれが愚問だとしても。

人は時々彼に尋ねた。

「貴方がいつも歌っているのは何故ですか？」

「何を歌っているのですか？」

彼は必ず笑って答える。

それは、諦めないための唄です。私と同じように、名など無いのですけれど。

その唄を聞けば、知らず知らずのうちに人は明るくなれるのだという。

空高く、澄み切った情景を切り裂くように鋭く、けれど柔らかく。

そして優しく、時に厳しく。明るく、若しくは暗く。

人によって違うのだそうだ。

ある時、旅人は歩幅を緩めた。相も変わらず動き続ける景色と時間を横目に。

ほ、と溜め息をつく。すっかり足を止めてしまう。

薄汚れたコートから、砂時計取り出す。くるりとひっくり返せば、ピンクの砂が零れ始めた。

砂の流れに合わせてゆっくりと言葉に節をつけて乗せていく。

旅人の横を絶えず人は通り過ぎていった。旅人のことなど見えていないかのような反応で。

旅人は青い空を見上げた。同化してしまうような表情を浮かべる。ただ、口ずさむ唄だけは止めずに。

「この唄は何処から聞こえて、何処へ消えていくのだろうか。」

人々は見えぬ姿から聞こえる唄に耳を傾けた。

旅人はただ笑っている。己の声は聞こえないと知っているから、ただ笑っていた。

「この唄、懐かしいですね。昔も同じように聞いたことがあります。」

傍をすれ違った青年は、そう言って連れに笑った。連れもまた、微笑んで頷いた。

「昔旅したときに私も聞いたよ。」

それでも人々は旅人には気付かない。記憶や思い出はあるのにも関わらず、彼の存在には全く触れないのだ。

「きつとまた何処かで歌っているんだろうなあ、」

砂時計は刻一刻と終わりを示していく。旅人は立ち上がって、また歩きたした。

そして、再び人々と数少ない会話を交わしながら、長い長い果てなき道を進んでいくのだ。

名も無き旅人と名も無き唄が残した、懐かしき記憶。遠く昔から世界に響く唄は、きつと貴方の心の奥底にも眠っているだろう。

よく耳を澄ませば、何かが目覚める音がするはずだ。その時に振り返れば、優しく微笑んで歌う旅人が見えるかもしれない。

どこまでも続く空は、何処にいても同じだから、

例えば、姿や気持ちが変わったとしても、旅人だけは変わらずに傍に。

底無しの海から引っ張り上げる（前書き）

BL要素有り注意

底無しの海から引っ張り上げる

急に目の前が真っ暗になった。
急に身体が重くなって、そして……
倒れるのはスローモーションで。

何も見えない。見えない代わりに最大限に拡張された感覚で壁を伝う。

ここで足を止めれば、底無しの海に沈んでしまうから。
でも、正直言ってそんなこと考えてる余裕なんてない。今にも重力に押し潰されそうだ。

「死ぬってこういうことか」

振り返れば大袈裟ではあるが、この時は本当に地獄のようにゆっくりと感じられたのだ。
視覚は相変わらず奪われたままだ。そして平衡感覚すら失われている。

今どこを歩いているのかは疎か、どこに居るのかすら分らない。
……自分の家なのだけんど。
自嘲気味に口角を上げる。意識を手放す準備が出来たとでも言おうか。

徐々に床が底無しの海に変わり行く。

「もう一度だけ、会いたかったなあ」

声にも形にもならず心の中で呟いた。彼に会いたかった。がくん、と世界が揺れた。もう身体は半分傾いている。そして僕は意識を手放した。

暖かい手が伸びる。その腕の主の顔は見えない。だけれども、優しい声は明らかに聞き慣れていて。

「助けにきてくれた……？」

「大丈夫か？しつかりしろ」

僅かに頭を縦に振る。未だに身体は重たいが、彼の体温が徐々に僕の身体を温めてくれる。

「さっきよりは、大丈夫。」

「良かった。心配したんだぞ、倒れてるから……」

死んじゃうかと思って。

ふい、と顔を反らされる。

「もう心配いらないよ、ごめんね？」

僕は微笑んだ。まだまだ無理矢理な笑顔だけど。彼はほんと頭を撫で、笑った。

「お前が柔なわけないもんな」

「酷ー」

「救急車呼ばなくて平気か？」

「うん。呼ばないで」

暫くすると、視界が元に戻ってきた。彼の顔がはっきりと見える。

「あ、見えた」

思わず呟く。彼の癒やされる笑顔が目の前にあった。

「よし、もう大丈夫そうだな。一緒に居るから寝ろよ」

彼は典型的ツンデレだと思う。こんなときにはデレるんだから、と僕はうつらうつら考えた。

ふわふわ、と頭を撫でられ髪を梳かれ、ぼーっとする。甘えさせ方が上手いんだ、ほんのたまになのに。

「ありがと、ちゃんと寝れそう……」

再び僕は意識を手放した。
最後に優しい「おやすみ」を聞いて。

「んで結局昨日のは何が原因だったんだろう。」

「何だろうね。でも何でもなくて良かった。次は本気で心臓止まるからな？」

「ごめんごめん」

僕は胸の前で手を合わせる。彼はこつんと軽く小突いた。

人の――いや、彼の温もりは何よりの睡眠薬。

互いの未来には、互いの存在が邪魔なんだ

つれないね、って苦笑して、

見られないように顔をうずめた。

この痛いくらいの空気に当てられ、私たちは無言だった。

言い出すタイミングを見計らう。

口を開くも、直ぐに閉じてしまう。

「何か飲む？」

居たたまれなくなって適当に声をかける。ただそれで終わってしまったが。

「うん。」

コーヒーを入れて差し出せば、サンキュと返事がきた。

「なあ……別れよう。」

「うん。」

分かっていたこと、どちらかが切り出さなければいけなかったこと。だけどいざ言われたら、心に穴が開いたよう。

「ごめん」

「分かってるから、大丈夫。仕方ないことだし。」

「明日から他人だね」

他人　という言葉は思うより重かった。でも私は笑って言う。

「それでも一緒に居られるから」

「明日からもよろしく」

幾ら好き合っている、それだけでは居られないこともある。

未来か、愛か。究極とも言える取捨選択で、私たちは未来を選んだ。いつそ嫌ってくれたら、と何度願ったろう。傷付くけれども引き摺らないような別れ方だから。「嫌い」や喧嘩にかこつけてしまえば、ここまで辛くは思わない筈なのに。

「つれないね」

肩口に顔をうずめる。この匂いで満たされるのは最後なのだ、と思えば無性に涙腺が緩む。

「見ないから……泣いちゃえば？」

優しくポンと背中を押される。何かのスイッチが入ったみたいに私は泣いた。お世辞にも可愛くもおしとやかでもない泣き方で。

「ありがとう、すっきりした」

幾分マシな顔つきにでもなっただろうか。ほんの少しだけ、覚悟が出来た気がした。

「とりあえず、荷物はまた取りに来るから」

と言ひ、今持つて帰れそんなものだけ詰める。ふと顔を見れば、哀しげな、寂しげな、表情で言われた。

「このコーヒークップだけ、置いていつてくれないかな？」

本当は全てこの家から消すつもりだったけど。匂いも思い出も。それでも私は頷くしか出来なかった。

それから互いの家の合い鍵を渡して、

最後のキスをして、

振り返らずに家を出るまでが、

私たちが出逢った日付の、

——最後の10分間。

互いの未来には、互いの存在が邪魔なんだ。

もう一度強く言い聞かせ、見えない姿や家や、来た道を振り返らずに先に進んだ。

意思疎通

視線をぶつからせるだけで、いや、その存在が隣にあるだけで解る。それが最高の関係だと思う。

ふつと笑って頷く。

声に出さなくても分かる関係。いつの間にかそんな関係になっていた。

長い間連れ添った…そんな感じ。

勿論人並みに喧嘩もした、決して必ず近くに居るわけでもない。寧ろ傍に居ないことの方が多いくらいだ。

僕らはそれぞれの親友のところにいる。でも、いざ一緒に居るときは何を言いたいかわかる。

「ね。」

つてそう言って顔を見合わせれば、同時に笑う。

つかず離れず、そんな距離が心地良くももどかしくも感じるのだけ。

僕らも初めはこんなんじゃないくて、普通の友達だった。

特別仲が良かったわけでもない。だけど、よく似通っていたと思う。いつの間にやら離れられない存在になっていた。

一時期の喧嘩だって、今からしてみれば些細なものだし、遠い過去のような。

そしてある程度一緒にいれば、後は離れていくだけになるのだ。物理的な距離は徐々に開いた。だけど精神的にはまだ傍に居た。

傍に居て笑ってる。そんな図が見えるんだ。

それは少しくらいは僕も嫉妬をした。離れ初めはそりゃもう嫉妬。僕たちの間に入ってくる者は嫌いだった。

でも今はどうだろう。

今ならきつとどうもならないけど、あの頃は初々しかった。

今では心が繋がっていると実感したから大丈夫なんだ。

どこまでも一緒に行ける気がした。僕らなら、と思えた。

一緒に居なさそうと思われているが、そんなことはない。今までが居すぎただけなのだ。

だから僕はいつでも言えると思う。

「僕は君とならずっと一緒に居られる」と。

こっばずかしいけど、いつか言える機会があれば、笑顔で。僕らが出会ったときのような幼さと若さと行動力を兼ね備えて。

視線をぶつける。

全身で存在を感じる。

それだけで言いたいことが伝わる関係って、素敵だと思うだろう？

僕たちはそんな最高の関係。

ありがとうって。

真っ直ぐな目で君は言う。

無駄に過ごしてきたわけでも、愛のない間柄だったわけでもない。ただひとつの「愛してる」って五文字を伝え損ねただけ。

でも君はその言葉は他から受けていた。嫉妬はしない。自分が言えない事実が苦しかったから。

そこで、「好き」の二文字だけでも口に出せていたら、少しはましだったかもしれない。

なのに、変なプライドが邪魔をして言えなかった。

愛を伝える言葉を最後に言ったのはいつだったろう。覚えていないくらい昔の話。

傍にいて、口に出せない分、目や行動で示した。勿論言葉も大事だけれど、言わずとも解ると思っていた。

君が言っただけが欲しかったことも、甘えたかったことも、全部知っている。でも、いざ言おうとすれば声帯はこれっぽっちも震えてくれなかった。

大切だから「愛してる」をしまったんじゃない。愚かだから。

君はここ暫く泣いていたのだろう。ずっとずっと悩んできたのだろう。

「人生の半分を占めるこの期間は無駄じゃない。

やり直せたとしても、きっと同じ道を歩んで繰り返すと思う。

例えば結果は変わらず苦しくても。」なんて言うくらいだから。

そしてあんな言葉を口にした。

止められないよ、そんな目で言われたら。

「愛してる。」「ずるい、今更。」「

言えなくてごめん。」「折角決心したのに揺らぐじゃん。」「

真っ直ぐな声で君は言う。

ありがとうって。

心音／救い

【心音】

心臓を宥めるように 胸に手を当てる。

今にも壊れそうなこの身体で 果たして何が出来るだろうか。

肺は空気を取り込めず、 喉は声帯を可笑しくし、

胃は食物を拒否しだし、 心臓は全てを狂わせる。

頭は感覚を失わせ、 眼は視界を歪ませる。

この身体は既にもうダメらしい。

崩れた足に力はなく、 右手は強く心臓を鷲掴む。

いつそ止まってしまえばいいのに。

このまま苦しみに沈むくらいなら。

【救い】

花が枯れてまた咲くように。
二人の仲がまた戻ればいい。
美しい花のように、
輝いた日々になればいい。

君が優しく笑って花の世話をする姿が
どうしても頭から離れない。染みのようにこびりつく。
ちゃんと世話してよね。暫く居ないんだから。
悲しげな顔、寂しげな表情が零れた。

あの花は君に幸せをもたらした？
明るい未来が見えていた？
聞きたいことだらけで、逆に言葉が出なくなる。
温もりも匂いも失せた家で、どうすればいい？
花が重ねた記憶と、
未だ返らずの鍵だけが、
僕の救いだった。

夢見桜

季節外れの夢見桜が、僕に儚い夢を届けてくれた。
その訪れはいつも突然で。

今日も、僕の胸にツンと針が刺さった……気がした。

「夢見桜、か」

それが、夢で終わらない桜なら、甘い味でもするんだろっ。

それはそれは虹玉みたいに甘く、コロんと鳴らして。

ああ貴方に会いたい、なんて無性に思うなんて。

その笑顔を見た瞬間に、ちくってさ？なんか只の乙女じゃん阿呆みたいな。

この夢想、夢物語をどうかしてほしくらいだ。自分では抜け出せないから。

「こんな冬近い季節に桜なんて咲くなよ」

雪じゃあるまいし、空をピンクに染めるだなんて。しかも散ってしまえば後は白く積もるだけなんて。

「なんであんなこと言っの？」

言葉が過去を呼び覚ます。思わせぶり、なんで僕の独りよがりだけどね。

いつもそうだ。

携帯も、過去も、桜の花びらも、全部あの川に捨てたいのに。またあの川の桜を付けて帰る。

今日もそうだ。

見上げた桜の木が他より大きくて、何故か単純に「これが夢見桜かあ」と納得。

それこそが夢だけど。夢なのだけれど。現実と思わされてしまう。

季節外れの桜が、普段通りの季節に咲きますように。

ふっと息を吹き掛け、知らず知らず持つて帰ってきていた花びらを散らした。

綺麗なピラミッド

僕は、君の為になら自分を犠牲にしても良いと思った。

その横顔が、哀しみて溢れないように。

ずっと僕はそう思ってきたんだ。

心に鍵をして、枷を付けて、海の深く深く、君が潜れないほど深くまで沈めた。君が溺れた川よりも深い場所まで。

僕は、君の為に傍に居てあげた。泣かないようにと。

寂しいときは一緒に居たし、泣きたいときは胸を貸した。楽しいときは一緒に笑って、嬉しいことは言い合った。

一番じゃなくても、二番で居られる自信があるから。

そして僕は君の優しさに甘えた。君はいつまでも優しかった。

否、今も、これからも優しい。

それがどうも僕には合わなくなっているようだ。

だから僕は君の為に、最後に君の好きな歌声で唄おうと思う。

池に月が砕けたとき、僕は君との約束を破るけど

再び池に月が昇ったときは、君はきつと笑ってる。

きつと、その大きな目を細めて困ったような笑みを浮かべて、謝るんだろ。

でも僕には届かない。僕は世界一綺麗なピラミッドを壊してしまっただから。

僕は僕の為に、僕を犠牲にして。

そしてピラミッドの頂点をちよんとつついた。

ガラガラと大きな音を立てて崩れていくソレが、

僕の枷を外して、海から心を引っ張りあげた拳句、崩れていく涙腺のように思えた。

今じゃ更地だけど、少しずつ綺麗な線が引かれていくのを、僕は遠目で見ていた。

贗作

思わず反らした瞳の中。真っ直ぐ僕を射抜いていました。
水に映る月の様に、貴方の瞳の中に僕が居ました。

僕は、君に映った僕を見ました。

でもそれは、僕であって僕じゃありません。貴方の望む僕じゃありません。

貴方の求める僕は、居ないのです。

目の前の者は贗作。ニセモノ。空想。

ほら、手を伸ばしてみて下さい。僕の核には届かないですから。
触れるって？

無理ですよ、それは只の飾りだから。

僕の身体と偽った鎧だから。

微熱が運んだ雪は、白くて甘くて美味しいでしょうか。

貴方とその下で共に居た季節がやってくる。

偽物だけれど、冬の寒さと貴方の温もりだけは、そこに。

僕が染めて、君が溶かした季節が
そこに。

思わず反らした瞳の中。真っ直ぐ僕を射抜いていました。
まるで本当の僕を探すかの様に、心の奥を見つめていました。

L I F E

同じ日常でも、僕らはそれを望むんだ。

つまらない。

溜め息混じりに口にすれば、後悔が押し寄せる。
つまらなくて良いじゃないか、普通の生活なんだから。そう自分に
言い聞かせて、立ち上がった。

外を見れば、寒そうな天気だった。枯風が残り僅かな黄色い葉を揺
らす。

まるで身震いしているようだ。

そう思ったら、自分まで寒くなってきた身震いした。

室内で環境も良いはずなのに寒いのは、心に隙間があるからだ。な
んで普段は思わないセンチメンタルな言葉を心に説いて。

秋の所為だ。冬も近づいて閑散とする景色の所為だ。

何を慌てて自分に言い訳するのか、自分でも分からぬままに呟いた。

幸い人はいない。皆出払っている。つまるところ、留守番なのだ。
この気持ちを気付かれずに済むといえれば幸いだ、そもそもこんな
気持ちになったのは人が居ない所為かもしれない、と再び空を見る。

早く帰って来ないかな、と大切な人を待ち焦がれる気分でした。

ただの日常は、僕らにとっては大きな幸せだった。

変わらないことは、僕らにとっては大きな変化だった。

汚れた心で純粋な志しを目指すことは、僕らにとっては大きな壁だった。

—— だけど僕らは、一緒に居た。一緒にいれば何でも出来ると気付いたのは、皆と一緒に居たからだった。

幸せだったんだ。

きっと、僕らは。

目に見えぬ絆を抱いて、汚れた翼を重ね合って。

そして他人が嫌う日常を、貪欲にも欲しがった。手に入らないと知って尚。

否、知っているからこそ、望んだ。

少しの、極僅かな幸せが大きく思えるから。

笑って

泣いて

怒って

喧嘩して

慰め合って

喜んで。

同じ空間と時間を共有するだけで、充実した毎日になる。

例えそこに、悲しみしか残らなくても。

僕らはそれを希求する。

オルゴール

耳に届くのは微かなメロディ。
静かに記憶をまさぐるような
そんな不思議な表情をしたオルゴール。

机の上にちょこんとその小さな体で
大きな存在感を醸しだしている。
「ああ、君だ」陽だまりが笑う。
手が届かない陽だまりだけれど。
僕は闇の中に住む者だけれど。
そのオルゴールの音色は一筋の光になる。

「プレゼント」の言葉の響きは、
僕と君の間を埋めた。
こっばずかしい、こそばゆい、
「ありがとう」の代わりに。
代わりにこのメロディを。

幸せと孤独の二元論

携帯が鳴った。

「もしもし？」

『なあ空見て？』

遠ざかる空は、

『今どんな？』

貴方の言うような、

「薄く曇ってる」

青空も、

『そか、こっちは綺麗に晴れててさ。見せたかった』

幸せも、

「なんで電話したの？」

不器用な恋の行く末も、

『この空見てたらな、君の笑顔が思い浮かんだから』

何も見えないけれど。

「ありがとう」

無邪気な声を聞けば、

『一緒に景色見たかったのになあ』

同じ空の下で生きていると実感する。

「この距離だから無理だよ？」

貴方が、

『そうだよな……結構離れてるもんね』

一番愛しく思う人でも、

「うん」

一番大切な人でもなく、

『じゃあ今度一緒に！』

この自分を選んでくれたことが、

「楽しみにしてる！」

とても嬉しく思えた。

『蒼さと光が目 に 沁みるなあ』

貴方の空のように、

「そんなに？」

青空も、

『ああ。』

美しさも、

「見たかったな、貴方と同じ空を」

透明さもないから。

『うん』

貴方との距離を感じて。

「切な??」

貴方と世界が違うのだと、

『泣いてる?』

無性に思い知らされた。

「ううん、大丈夫」

手を伸ばしても届かない未来。

『ごめんな』

貴方はしっかり掴みとって？

「じゃあ、また」

幸せと、

『うん、またな』

孤独の、

「……、」

二元論。

刹那に散る

僕らは、数えきれない冬を送りました。
僕らは、馬鹿に思うほど傍にいました。
僕らは、勘違いをする程春を見ました。
僕らは、すれ違う度に笑い合いました。

それは、許されざる恋。

それは、叶わぬ恋。

それは、屈折した恋。

ほわりと浮かんだ蜃気楼のように、愛を誇張した世界でした。

僕は、それでも幸せでした。

僕は、切なさも抱えました。

嗚呼、

恋はあの瞬間に燃えて、やはり刹那に散りゆくのでしょうか。
心を埋めた君の温もりを手にせぬまま、刹那に散りゆくのでしょうか。

空が、泣いています。
僕が、泣いています。

つまらぬ理想論を洗い流すように、優しく降り注ぐのです。
そんなことをしても、君の匂いも、君の笑顔も、君の声も消えない
けれど。

イルミネーションが酷く目に悪く、僕は思わず涙を浮かべました。
痛いくらいに、涙するくらいに目映いのだと言い聞かせて。
そしてこっそり、一筋だけ涙を落とすのです。

君が僕の誘いに乗って、この公園にやって来る頃には、
その痕は既に消えているように
静かに静かに、軽い涙を落とすのです。

それは、許されざる恋。

だから僕は、笑ったのです。
君のために。
だから僕は、笑ったのです。
君の幸せを望むから。

背中合わせ

一人きりだなんて、特に、別に思わないけど。
だけど暗い部屋は怖くない、なんて
嘘はつかない。

偽りはいらぬ。だから愛も無い。

なのに暫くすればあの匂い。

ふわりと漂う貴方の匂い。

帰る場所はここなのだと、

厚い壁越しに言われても、

嬉しくもなんともないけれど。

少しくらい期待する。昔に置き忘れた

”期待”を。

互いの存在は主張しない。

空気よりも軽い関係。

それが嫌で、

それが苦痛で、

でもそれが心地好いなんて

口が裂けても言わない。

言えない。

秋空

秋の匂い。いつの間にか秋なんだと思わされた。
冷たい冬のような風が頬を刺す。

枯風に唇が乾いた。

こんな時に言えば良いのに、ねえ。

「こんなに寒いのは、貴方がいないからですよ」なんて、
言えるはずもないのだけれど。

メールに添付した空の写真。秋晴れ。

久々の写真だからきつと驚くだろう。

人工の空に見えても、色褪せて見えても、

あの透明な心に残るなら。

本文は添えずに送信する。今言えば、止まらないから。

こんなにセンチメンタルな日には傍に居てくれれば良いのに、ねえ。

そんな我が侘、言わないけれど。

せめて、声くらい。なんてね。

きつと声を聞いてしまえば会いたくなる。

だから件名に一言だけ。

「貴方の上の空は、

綺麗ですか？」

蒼い空

蒼い空を写真に収めたくて、僕は携帯を取り出した。こんな時のためにカメラ持つてくるんだってなんて後悔して。

カシャ――。

画面を見れば、やはり肉眼と違った人工的な空で。望んだ景色はこんなじゃないんだ、そう溜め息をついた。

今度は腕を伸ばしてみる。写真立てのように四角を作る。

仕方ないから心のシャッターを切った。

カシャ??。

響かない空の音^{から}が頭に響いた。焼き付いたのは泣き出しそうな空。

だけど、”貴方の見ている空”とは程遠く。貴方の見ている景色の透明さが欲しいのに、と呟いて、
少しだけ泣いた。

誰も、貴方も、見ていないから。

誰も、貴方も、気付かないように。

貴方の知る僕ではないと思えば、
消えてしまいたく思えた。

やはり僕は、貴方の傍にいらませんか……？

そう口にすれば

とうとう蒼い空が泣き出した。

夕凧の時、黄昏の中

夕凧の時、黄昏の中

消えかけた時間が、

まるで巻き戻しを押したように
元に戻った。

だけどきつと、

心の傷を幾つも塞いで

僕は何度も繰り返すんだ。

「時よ止まれ」

は何度言った？

流れぬ時など満たされもしないのに。
止まった時など意味は無いのに。

偽って笑っているから、

どうか騙されておくれよ。

そう簡単には無理だろうけど、

見て見ぬフリをしてくれよ。

そうじゃないと、潰れてしまう。

一時停止を解除したなら

もう一度それを見ようと思う。

いくら辛くても選んでしまう

選択肢の無い選択。

此処でまた逢えるといい。
夕風の時、黄昏の中。
その笑顔が消える前に。

……弾かれたネックレスは
僕のトキを乗せて。

嘘・ウソ / abstract word

【嘘・ウソ】

切っても切れない仲ってなんだろう

切りたくても切れない仲ってなんだろう

切りたくなくても切れる仲ってなんだろう

切りたくて切った仲ってなんだろう

切りたくなくて切られない仲ってなんだろう

ほんととは来て欲しかったなんて言ってやんないんだから
だってもう切れる運命。なんてね？

感謝しろって言われて出来ないのはただヒネクレてるだけ

【abstract word】

夜が好きなのも、旅立ちたいのも、消えてしまいたいのも、

夜が嫌いなのも、

全て事実。

センチメンタルな気持ちは、

夜風が運んでくる。

I wish I was follow you . . .

叶えば良いのに。

そのためならなんでも棄ててやる。

なーんてね。

(って強がってみるんだ)

それも嘘。

(だけど、会いたいのは事実)

Hypothesis

仮説と理論を繰り返して、
実践になんか移さないで、
キミは何の為にソレをするの？

この世界に理論も哲学も通じない。
決められた未来もない。
ただ僕は決められたルールを
ただ静かに歩いていく。

折れたノートの端っこを
何度直しても戻らないように、
ぼくの心の端にちゃんと折ってつけた傷は、
キミが気付かないくらいに小さくて
且つ、深くて。

口にした機械気味な言葉たちは、
キミが思うよりも強く
ぼくを咬み千切る。
でもそれはあくまでもロボットのよう。

キミは生きているの？
ぼくは生きているの？
似ているようで似ていないから、
ぼくには分からないけど。

キミもぼくも生きてはいない。

吸い込まれそうな燃え上がる碧い空。

キミの振りがざす正義や理論に似ていないかい？

……遠くにあるもの。

近いようで、現実味がないもの。

実証不可能な仮説を現実にしたくて

キミは何を犠牲にしたの？

世界もぼくも未来も捨てて、

キミは何を手に入れられた？

床に散りばめられたレポート用紙は、

黒く汚れて。

そう、まるで

ぼくたちの心みたいだね。

夢みたいな未来を語っていた頃は、

きつと輝いていて、

煌びやかな笑顔でいたんだろう。

いつからかインクのように黒く、

未来は滲んで、気持ちは霞んで。

キミの仮説は現実にはならない。

キミの理論は通用しない。

ぼくらの感情だけの世界には、

月と囃（前書き）

百合要素有り注意

月と竜

今、ここで、私が

「好きだよ」

って 冗談めかして言ったら
君はどうするのかなあ。

内心引くでしょ？

ねえ ねえ？

いきなり何って？だって、

ただの 友達

ただの クラスメート

それだけの関係なんて、虚しいじゃない。

だけどきつとそれは、

君を傷付けて、悲しませちゃう。

うん

そんなの分かりきったこと。

だから私は、そんな哀れな台詞言わないもん。

今はまだ、返事はいらない。

「ごめん」なんて欲しくないから。

それを聞く勇気なんか、これっぽっちも持ち合わせちゃいない。

些細な幸せに浸ってればいいの。
側で

「勉強分かなあい」

とか、今どきの学生みたいにしていればいいの。

じゃあ。

今、ここで、私が

「好きだよ」

って 本気で言ったら、
君はどうするのかなあ。

やっぱり引くでしょ？
ねえ ねえ？

それも駄目か。

そりゃそうだよな、どんな私でも君には不釣り合いなんて
月と鰐すっぽん。

せめてさ、せめて。

友達 の立ち位置はキープしてもいいかな。

親友 のポジションだって要らないから
輪から外れたところから見えるように。

そう思っつて、

「ああ、昔もこんなん思っつたっけな」
っつて思い出した。

キミに貸した赤ペンは、

もう私の手元には無いのだけれど。

キミの笑顔も もう、

私に向けられることは無いのだけれど。

今は君だけでいいやなんて

余裕ぶって 心でウインク。

あの時の言葉、私は覚えてるから、

私だけ覚えてればいいかなって

何となくポジティブにいける気がした。

それでも本当は、

「好きなんだ」

って言うてやりたい。

叶わない不毛な恋を止める気は毛頭無い。

その笑顔と優しさを感じられれば、

それでいいんだって。

例え君が女の子でも。

それだけ君に、

惹かれてるんだって。

例え話

「例えば」とか 「もしも」とか 君に沢山言っ
て困らせてしまったね
本当は辛かったろ？

何年も前だから 上手く思い出せないよ
初めてのケンカには
戸惑いばかりが残った

いつかは映画みたいな恋が
出来ると思ったよ……馬鹿みたい？
こんなに離れて 分かったことは
この空は 予期せずに
冷たく見えるんだってこと

夕焼けから 思い出すよ
笑い合ったり 泣き疲れたとき
沢山あったね
だけど僕には
何でかな、悲しくなるんだ
もう言葉 伝えられないのに

「例えば」と口にした その時の悲しそうな
微笑みが 心から

離れられないんだ

「この世から この僕の存在が無くなって
君一人 置き去りに
してしまった時は こうして」

泣くのは はじめの一日だけ
他は笑っていて……お願い
この心臓もくれてやるから
空を見て 思い出して
朱が良く映えるんだってこと
あか

寄り添って過ごしたね 寒さとか寒いだり
夢を見た日の朝は
ずっと語り合ってたんだ

今でも細かい所までだって
覚えているんだよ……君も？
思い出にしか なれないとしても
記憶から 消さないで
空から見守ってるから

その隣が知らない人でも
君が笑ってくれるだけで
心おきなく
” さよなら ” 出来る

ひとりでも君なら行ける
擦れ違みらいう 僕らの零標

夕焼けから 思い出すよ
笑い合ったり 泣き疲れたとき
沢山あったね
だけど僕には
何でかな、悲しくなるんだ
もう言葉 伝えられないのに

例え話なんて こんなものなんだろう
どちらか居ないような そんな世界は考えられない……

声が枯れるくらいの。

声が枯れるくらいに叫んだとしても
わたしのコエはあなたのミミに届かない。

必要だと、言っただけだった。
泣いていいと、言っただけだった。
大丈夫だと、言っただけだった。
頑張つてと、言っただけだった。

けどこの気持ちは
表に出せずに消えていった。
あなたに伝えることも叶わずに、
不本意に産み落とされた幼子のように
ただ消えていった。

この声が枯れるくらいに叫んだなら
あなたに届くかしら？
なんて考えても無駄ね。
足掻いても藻は絡まって、
わたしの身体を深く沈めていく。

腫れぼったい喉から

圧迫された肺から
驚掴みにされた心臓から
串刺しにされた胃から
何が滴り落ちても、
きつと地面に鮮^{せん}少な染みを作る前に
蒸発してしまうだろう。

それがわたしは嫌だから、
何も構わず消え去ってしまうなんて
ただ惨めで仕方ないだけだから、
わたしは願いをかけた。

誰かの心に残るように。

だけどそれではエゴだけだから、
じゃあ

誰も泣かないように、
悲しまないように。

そう願いをかけた。

それでもあなたが必要だと言っのなら、
わたしは喜んで生き長らえようと言っのに。
そうとは言ってくれない無慈悲な人。

それなら、ずっとあなたの心には残れるようにって、
薄ら笑いを浮かべながらわたしは逝こうかしら。

朝になったら死んでた、
なんて掻き暗すよう。

それもわたしの為の終わり方なら、
冷たい御影石にキスでもして
あなたの見上げた空でも
永遠に見上げていたい。

必要と言って。

声が枯れるくらい叫んだとしても
あなたのミミには届かない。

声が枯れるくらいの。（後書き）

「冷たい御影石に」の部分は、ディキンソンの詩から軽く引用させていただきました。

深い夜の訪れ

小難しい曲も説明も
要りやしないんだって。
胸の霧は晴れないのさ。

かけ忘れたCDは、いつの間にか砕けてた。
だけど血まみれた部屋の中には
音楽だって必要だろ？
だから真っ新なCDをかけて、
空間中狂気の曲で満たしたろう。

大好きだけど、大嫌い。
だからこの世界なんて壊しちまおうか。
CDとか鏡とか、砕くたびに
片隅から刃零れしてく。
オレの身体も同様。

手首が踊って、赤い軌道残す。
痕だって立派なアクセサリ。
丁度ソックスの境目に
カサカサに色褪せた月の弧が。

やったれ やったれ。

胸を掻き^{むし}きつて、ぐちゃぐちゃに掻き混ぜて
圧迫してる岩やら石やらを排除した。

うーん、

でもまだ取れないんだなコレが。

ヒーリングでもやってみるかっつて、

阿呆の子みたく、手を翳す。

痛み？んなもの取れねえよ。

きつと朝なんか来ないんだ、

こんだけ悶えてれば夜は深まって

浮かぶことはない。

足元だって揺れてら。

息詰まって仕方ないんだ。

オレの頭ん中を支配してる

” 死 ”

の一字。

死にたくないよ、まだせめてさあ。

もうちよつとくらいは皆を見ていたいな、

一緒にいたいな。

嫌な日常すつ飛ばして、

オレに幸せでも来い。

嫌な日常のオレは消えて、

夢の日常のオレだけ残って、

大きいことなんて背負わずに済むように

させたつてくれよ。

苦しい、苦しい。

今はオレだけでいいじゃんか。

今はオレだけで。

オレのことだけを^み看て。

エデン

痛いよ 辛いよ

そんな言葉、神様なんかには届かない。

人間の魂は何処に行くのだろう。

穢れなき海を渡って

僕らの知らない世界^{エデン}に行けるのかな。

炭になって人と呼べないようなものでも

生前は同じ世界にいたなんて

信じられる？

信じられない。

ねえ、神様はどうして

罪の無い人を殺してゆくのかな。

代わりにあいつが、

なんて思うことがありすぎる。

救われるのは悪い人。

痛い目を見るのは良い人。

世間の法則

変えることは出来ないし、

変わることも無いんだろう。

腐蝕した樹の幹を
つんと押して崩すように、
人の命も
つんと押されて揺らぐ。
その位に軽いもの。

僕の命も軽いもの。
死にそうになる度に
死に損なう度に、
生きることも死ぬことも
怖くなってくるから。

乖離した記憶から
未来を予測したとき、
銃弾が顛こめかみを貫通するような
鈍重な痛みが襲う。

肺が空気を求めて騒ぐから
息をしてたのに
なんだってこの身体は不便だ。
安直なアンテイクのよう。

痛かったでしょ？
辛かったでしょ？
神様なんて考えない世界で
一休みしてきて下さい。

……僕はもう少しだけ
神様について考えてきますから。

「神様は居ない」と

今から結論付けてしまったら、

僕は生きられなくなってしまうから。

人間の魂は何処に行くのだろう。

穢れなき海を渡って

僕らの知らない世界^{エデン}に行けるのかな。

星屑

そこにあるはずの

心地よさが見えない

私の隣には

今 何があるのだろうか？

月が笑ってる

馬鹿みたい と呟いて

堕ちた孤独さえ

夢を見て解決した

ねえ 私のこと、見たでしょ？

そんなにも 遠い話じゃない

星屑を手取るように

優しくさだけ 残して欲しい

願いつか夢や希望を

どこにいても 叶えてくれる？

散々泣いたよね

寒い風の中 独り

私の傍らは

透明の愛があつた

ねえ 行く先々の道から
見えてきた これからの私よ……

この場所で 多く学んだ
声が枯れて 名前を呼べない
温もりに名を付けるなら
私は どうするのだろう？

晴れたら 好きなのに行ってみよう
具ついでに調べたら 何か分かるかも

擦れ違うことで成り立つ
空気のような この関係を
心から見つめてみれば
繋がれるね 試してみるよ

星屑を手取るように
優しくだけ 残して欲しい
願いつか夢や希望を
どこにいても 叶えてくれる？

確定条件（前書き）

残酷な表現があります。観覧は自己責任でお願いします。

確定条件

撃ち殺した鳥が
歪めた目の奥。

飛び出る直前の
果てしなく稚拙な
濁ったビー玉。

その黒い嘴が^{くちばし}
黒い物体の赤い腑を^{はらわたまさぐ}弄って
その姿を見てしまったから
逆にこの人間様が
御前の腑を弄ってやる。

白い冷たい凍えそうな
季節外れの大雪の中
其れを深紅に染めながら
背徳を誓った。

千切られた内臓を
丁寧丁寧に切り離して
再度入れて。
綺麗におめかしでもしようかと
道具を持って笑うんだ。

御前の羽根を一枚ずつ剥いで
御前の羽根で建造物^{モニメント}でも造って
御前の血で染まった雪で

頬染めや紅でも作ってやるか。

御前はどんな死に様が良いよ？

御前はどんな墓が良いよ？

烏の耳も口も役目を果たさないけど
一応聞いてやる。

但し死に様は確定条件。

人間様に不愉快な気分を与えた御前は
自分が何が故に撃ち抜かれたか
永久に知ること無いだろう。
弄られた気分はどうだい？
最期の姿は哀れじゃないか
最後の肉片を落とした。

眼前の景色は非常に良いと
誰か明言してはくれないだろうか。
狂気に満ちたような雄叫びは
遠くで耳を掠るのに
この身体は雄叫びを上げないのだ。
だから誰かこの行為を
正当化してくれ。

御前も人間様も同じだ
ものの条理は心得ているつもりだ。
寂々（そうぞう）しいから
飽くまで奇矯（きこう）を続けるだけ。
嗚呼、

御前が死んだことで
掻き暗す者は居るのか？

さはれ、

御前も人間も死に様は確定条件などとは。

手を繋いだ日々

意味も無いような 何だかんだの日に
見つけた幸せが 今の僕を押している
独りの暗闇で 泣いてた僕を君は
光で包んでは 連れ出してくれたんだ

ねえ 今も傍に居れるかな？
耳の奥底で 笑い声が籠もる

手を繋ぎ 笑い合ってた
どんなことも 跳ね除けてきた
けど未だ 知らなかったんだ
日々は常に ありはしなくて

時には3人が 嫌いなこともあった
昔のトラウマが 僕たちを邪魔していた

ねえ それでも君は違った
今じゃ3人も 悪くないと思う

駆け上がる 坂道の上
僕は先に 待っているから

会いたくて 仕方ないなら
空を見上げ 笑って欲しい

「これまで 流れた音は幾多で
心から唄ってた あの日を思い出すよ」

手を繋ぎ 笑い合ってた
どんなことも 跳ね除けてきた
「ありがとう」って 言いに行ったら
きつと君に 怒られるかな？

駆け上がる 坂道の上
僕は先に 待っているから
いつかまた 会えたのならば
空を見上げ 手を繋いでね

手を繋いだ日々（後書き）

300曲分近くストックが溜まってるので、少しずつ歌詞を放出していこうかなと。

死ネタとも何とでもとれるように書いています。私個人の解釈では、死んだわけではないけれど、関われないところへ行ってしまった・・・そんな感じです。

「これまで〴〵思い出すよ」の部分からして、耳が聞こえなくなったというね。

でも、自由な解釈で読んでください。

詩ほど歌詞は詳しい内容を口にしません。

インセンス

スカート広げて 少しだけ若く見せて
今から急いで あなたに会いに行きます

チツクタツク時計が お決まりの時間告げる
隣に居たその姿は 12年前の私達^{ふたり}

年の差は要らない 身長差だけで十分
「お姉ちゃん」って口癖 嫌い、嫌い
端正な横顔 盗み見しながらも
少しだけ誇らしく思う

「大人の余裕よ」 片目瞑り笑ってみる
それすらあなたも もどかしく思っているの？

擦れ違う可能性 非常に高い確率
だから強く捕まえて 蝶のように逃げないよう

ひらりかわしくてく ツンデレな私
本音はもっとキミに 甘えたい
昔と変わらない 壁を乗り越えて
やがて寄り添えるようになれる？

せまい1LDK^{エル}に 独り香りを焚いて
寂しさ紛らわしてた 12年後の私

年の差は要らない 身長差だけで十分
「お姉ちゃん」って口癖 嫌い、嫌い
端正な横顔 盗み見しながらも
少しだけ誇らしく思う

越した3LDK^{エル}は 二人だけで広くて
「暖をとるためだから」と 近付いて抱き合った

インセンス（後書き）

歌詞より。

波動と共鳴

僕Ⅱ私、
僕私。

嘔吐きの僕と誠実な私。

仮面被る僕と素の私。
(生きる術でしょ?)

厚くて堅い殻に籠もる僕と裸の心の私。

知ってほしい僕と知って欲しくない私。
(あれ、これはどっち?)

要らない僕と要る私。

自分に正直で有りたい僕とそうじゃない私。
(どっちも同じで違うかも)

嫌われ者の僕と好かれ者の私。

本物の僕と偽りの私。
(どっちが本物?どっちも贗者)

空虚な僕と笑う私。

独りが良い僕と一人が嫌いな私。

（噓、どっちも好きでどっちも嫌い）

ネガティブな僕とポジティブな私。

グレル僕と良い子な私。

（未だグレてないけど）

チューシャの痕が疼く、昔の痕も併せて疼く。
其処まで共鳴。

一つの音叉を鳴らせば、
波源から幾つも円を描いて
音は伝わる。

障害にぶつかっても粗密波は次に繋がっていく。
僕の人生みたい。
決して途切れられない捕らわれの身。

一つの音叉を鳴らせば、
隣合う音叉も緩やかに震えだす。
始めの音叉を止めても、
片方は鳴り続けるんだって。
僕と私もそんなん？
互いに互いを鳴らし合う？

366Hzの振動は、

増幅と打ち消しを繰り返して。
僕と私が存在出来るように
鼓動の振動も一秒間に同じ数だけ。
それはきつと増幅できるように、
音の波は同位相で。

嘘は吐いても良い？
貴方が思うより僕と私は脆いから。
僕を守るために僕は嘘を吐いて、
私を守るために私で居るから、
それでも構わないだろう？

物体の上っ面だけ見て
それで本質を判断した気になって、
何でもかんでも頭ごなしに否定して。
双極性の僕と私が、
いつぞやの八百万の神の一人のように
岩窟から出てこなくなったのは
その所為だなんて怖くて言えないよ。

……だから嘘吐きで良いじゃない。

片方消したら
片方も死んでしまうかな。
少しかだけ余韻を残して
其の首は手折れてしまうかな。

でもきつと、

新しい僕と私が

波動のように、波源から産まれる。

I f

目の前にある答えから
目を反らして
いつまで逃れられるだろう？

装い、優しい自分を
君に好かれるように
最後の時は近いから

傍にいて、
笑わせていられたら良いのに
それすらも
出来ないで終わるのは寂しい

もし君が僕と出会うことが無かったら
泣くこと知らずに生きてゆけるのかな

君が笑った、それだけ
それだけのことが
嬉しく泣き出しそうなんだ

見知らぬ景色描いて
綺麗に背負うのは
これで終わりにしよう

どこまでも

狡い人でごめんね、だけど
さよならが
言うのが寂しいから消えた

もし雨の後に虹が架かっていたら
みんなと誓った約束を見つけて

杜撰ずさんな夢も

悪くはないんじゃない？

胸に焼き付けた

優しさ持って

傍にいて、

笑わせていられたら良いのに

それすらも

出来ないで終わるのは寂しい

もし僕が此処に始めから居なくて
そしたら世界は安泰で

君も複雑にならなかった？

僕はもう此処には居られないけど

E i n s a w k e i t

理論も強がりも全て
全て崩されていく

頭蓋骨に穴を開けて
中身をぐちゃぐちゃに掻き混ぜて
痛みも辛さもすり潰しちゃえよ
おれの右っ側で彼奴が笑った

一瞬ぐるりと眼球が回って
皆殺しの地獄絵でも見た？
可笑しい思考回路に
おれの左っ側で其奴が泣いた

”躁”と”鬱”が激しいから
やっぱり、遂に、気付いちゃったか
苛々して物投げて
気分が上昇して、また沈んで

ライフフル
施条銃で眉間を撃っちゃってさあ
何らかのスイッチでも押してくれたらな
今じゃ自分で操れないんだもの
境界例とか双極性とか 分かんないけど
それに付随するものでしょ？

「バレちゃった、テヘッ」

なんて彼奴が悪魔の顔で佇んでいる
彼奴がおれの心ん中を
全世界に流してるんだ

人肌に少しでも触れれば
全部がバレちまうって

おれは人に触れないようにした
触れるときは 無心、無心
だけど世間の人は

人の心、おれの心を覗ける眼鏡を持ってるから
見えちゃうんだよ
恥ずかしくて憤死しちまうってば

「見んな、悟るな」

彼奴はケラケラ笑って

其奴は泣き叫んで

おれはどっちをすればいい？

嗚呼 判らないよ

おれは過激だよ

だって心は荒んでる

荒波？湖畔の水面？

全部壊れてくなら

全部壊れちまえ

おれはそつと嘲笑った

三人纏めて
”孤独”
なんだろ

刹那、イロコイ。

語りかけたら 微笑み返す
そんな日常 フワリと消えた
飾り物なら 可愛い物？
問いかけたとき 頷いたね

少しくらい 嫌いでもいい
耳鳴りが 責め立ててる
刹那 悲観 全部まとめ

包んだらなくしたの あの日も笑顔も何もかも
朝になったら どうなってるだろう？
色恋も動き出し 輝く涙もセツナさも
枕元に落ちて 跳ねて染みになった

指でなぞった 輪郭は今
ばやけていって 霞んで消えた
君の顔さえ 忘れたのは
美しいまま 残したいから

少しくらい 嗟来サライでもいい
棘が手を 決り始める

昼夢 架空 全部信じ

握ったら潰れたの 遥かな願いも希望さえ
朝が来たなら 目を背けるだろう
夏恋は訪れず帰るよ 気持ちも持っていて
震えぬもの 握り締めて離さない

刹那 遺憾 全部まとめ

包んだらなくしたの あの日も笑顔も何もかも
朝になったら どうなってるだろう？
色恋はサヨナラさ 煌めく涙もセツナさも
枕元に落ちて 跳ねて染みになった

刹那、イロコイ。
(後書き)

歌詞より。

パノラマ

夢を見てた 捨てられぬ記憶
大切に守ってきたものは
詳細も昔のままの
パノラマを抱えていたんだ

不安がって 変わることを極力避けていた

慣れたから もう大丈夫だっと思ってたのに
心はどうも違ったようだ まだ欲しい

ふと浮かんだ あの景色の跡
追いかけて迷っている日々
そこで立ち止まって
別の道に行きそうになってた

どこまで行っただって 過去には戻れない

重なった道どこまでも続いている 家は何処か？
あの場所はまだ帰る場所じゃない そうだけど

願いよとどけ　なんて言っではぐらかす

いつまでも抱いた　昔の理想

金繰り捨てて　歩いてでもいいから進んでゆく
足が棒になって動かなくても　ずっと

慣れたから　もう大丈夫だって思ってたのに
心はどうも違ったようだ　まだ欲しい

パノラマ（後書き）

歌詞より。

伝え聞いた気持ち

どうか君に届けばいい もどかしくて泣き出しそう
地平線の向こう側指して 梓に収めました

君は冬が嫌いなのかい？ 震える手を伸ばしたんだ
垂れてきては問いかけた雫 冷えて固まったね

何ヶ月経ってもまだ 近づかない距離 白紙
掻き鳴らした弦がプチン 修復に出したきり 戻らず

眩暈と”無理”を奪っていく 届かない僕と晏^{あん}な音楽
手に取る瞬間泣き崩れた 君の必死なメッセージ

空論に今絆されては 履き違えた眠り姫に
背中向けて「ごめんね」伝えた 街の明かりは赤

互いに一方通行 散らした花びらは沢山
伝えられない、でも触れたいよ 守れない世界が嘲笑う

怖くて散々後戻って 今更何を言えばいいんだよ？
的中してるのにイラつき 箱庭を叩き割った

どうか君に届けばいい あーだこーだ言わないでよ
沈んだ世界浮かせるの 僕だけでいい アメ、モドカシイ

眩暈と”無理”を奪っていく 届かない僕と暗^{あん}な音楽
手に取る瞬間泣き崩れた 君の必死なメッセージ

来ないよ、いない。 望んだように 諦めて君に手を振り返す
引き止める声を待ちながらも ゆっくり一歩を踏み出した

伝え聞いた気持ち（後書き）

歌詞より。

叶わない恋は辛いものです

サーカス

目を開け夜景を見渡す モノクロの星
港に一人で 立っている少女の
手の内 握ったチケットは破られて
日付も 場所さえ 読めなくなってたんだ

夢のステージを見たくて 並んで買っては楽しみにしていた
だけでもう 泪で滲む紙は意味を成さなくなっていた

チャイムの音を合図に 幕開けた未来への扉
少女は外気に晒されては 諦めてた
人影が近寄っていく 上から手を差し伸べてた
「行きたいなら……行けばいい」 笑ってた

「夢みたい」 ネオンに吸い込まれていく声
新しいチケット握らされ 背中押す

あの煌びやかな世界観や 押し付けられるような人混み
”それでもいい” 足を踏み入れ 光が体を包んでいく

シンパシー シンクロで成す 立派な舞台の姿は
好みなんてない そんなくらい素晴らしくて

「綺麗でしょ？」声が聞こえる　周りには誰も居なくて
そこには夢だけが詰まっていた

体が浮いている　今ならどこへでも行けそう　そんな気がした
少女にはもう　哀しさも何もなくなっていた　だから、ほら・・・
・

チャイムの音を合図に　幕閉じた　現実へ戻る
少女は未だに夢見心地　「でも、帰らなきゃ」
再び手を差し伸べてる影が姿を現して

「夢ならば、いつでも見においでよ」と・・・

サーカス（後書き）

歌詞より。

なんて、サーカス見に行ったことないんだけど（笑）

白い部屋

四方八方白塗りの壁。

ふわりふわりと漂う意識を

もつと固定させたくても無理。

鮪のように止まらない。

ぐるりぐるりと回っていく。

これは何？

おれを取り囲む白い世界。

上下左右関係無いから

浮きも沈みもしないなんてね。

座ってるのか立ってるのかすら分からない。

座ってたら後ろに引っ張られて

そのままどこまでも墜ちていく。

がたんと鳴るのは

何が倒れた音？

ぷちんと鳴るのは

何が切れた音？

染み一つない真っ白な部屋で

「どうしておれはひとりでいるの？」

紫陽花の鮮やかな紫でも

薔薇の生々しい紅でも

一筋だけ描かれさえしていれば、
きつとこんなに窮屈にも感じない。

パレットでも持ってきて

おれの好きなように塗ってやろうか。
さて、

何色にしようかな？

おれがこの白の眩しさに凍てつく前に、
鮮血の色に塗ってやろう。

事切れる前に、

この白い部屋から逃げ出して。

汚れた海

不覚にも深くまで沈む。

私は目を開けた。

周りは酷く曇っていて、
汚れていて。

世界は酷かった。

そんな状況を笑い飛ばそうと思って、
口角を上げた。
できなかった。

私は忘れてしまったのだ。
笑い方を、

そんな状況に悲観して、
悲しくなった。
泣けなかった。

私は忘れてしまったのだ。
泣き方を、

どれほど漂っていたのだろう。
深くまで堕ちた気がした。
長い時間が経った気がした。

そんなことは無いのに、
決して無いのに。

だって私はまだ、
生きている。

だから

俺の中の稚拙なプライドなんて取り去って。

だから

壊れてしまえばいいのに

（いや、”だから”の使い方間違ってるだろ）

じゃあ

愛想笑いでも浮かべてみる

（愛想笑う自分、気持ち悪い）

それなら

知らない自分を創ってみる

（もう造り尽くしたじゃないか）

夜風に当たって考えるのに

なんだか無性にすつきりしない

（ねえ 俺、どうすればいい？）

そしたら

反論でもしてみる？

（本音は反論するのに疲れた）

ならば

隠し通せばいい？

（んなことしたって解決しない）

どうしたったって

俺の良い様にはならないじゃん

（分かりきったことを）

人間不信をやめる？

（出来たら苦労なんてしない）

皆で生きてみる？

（信じられるか）

でも

一人じゃ生きていけないんだ

（この弱虫野郎）

”何も知らないくせに”なんて言えないよ

（だって伝えてねーもん）

だけど

分かった様な口利いて欲しくない

（絶対知られない自信がある）

しかし

”自由”とか簡単に口にするな

（俺は一度も自由を持ったことなんて無いのに）

夜風は酷い

慰めもせず 怒りもせず

通り過ぎるのも

あまりに静か過ぎる

（まるで俺が居ないみたいに）

そうか

居なくなっちゃえばいいんだ

（透明になってすっかり消えちゃえばいいよ）

だから

壊れてしまえばいいのに

（誰かに気付かれるより早く）

気付いて欲しいなんて 嘘

その前に消えて無くなれば

（望んだって叶わないのにさ）

稚拙な嘘だって

塗り固めれば大きい

（それにもっと早く気付いていれば）

それなのに

こんなことも悪くないな、なんてさ

（何かが可笑しい、狂ってるだろ）

その愛想笑いも

読み取れない表情や行動も

本当は溜め込む性格も

自分を卑下する性格も

人間不信なところも

そのくせ人には理解されないところも

君と一緒にだから嬉しいなんて

（馬鹿みたい）

嗚呼、そうだ

君を連れ去って遠い世界へ

（君とならひっそり生きてみるのも構わない）

s y m p a t h y

廻って廻って、また巡り合う。

夜桜が泣いた

微かな電灯の灯りを

その胸に宿して

私は遠くから

夜桜を眺めていました

世界はまだ

廻っているのです

届かない月に思いを馳せた

そんな淡い夜桜と同じ

届かない貴方に思いを馳せた

私は惨めでちっぽけな存在です

それでも桜は輝くの

昼には笑顔を振り撒いて

孤独は無い、とでも言いたげに

楽しいからと嘘ついて

夜には孤独を寂しがり

世界の音を遮って

月の笑顔を望みつつ

眠りについてゆくのです

そんな私も同じでしょう

愛想笑いを振り撒いて

それでも心此処に在らず

夜は孤独を喰らいながら

貴方をしみじみ想うのです

そして貴方の笑顔を望みつつ

眠りについてゆくのです

いつか えいえん を知るときは

貴方の傍に居たい

眠る二人は寄り添って

幸せな顔をしてるといい

これは 馬鹿な女の戯言です

(今だけ、この世界の音が 無くなってしまえばいいのに)

Para Gentleman / 君と私と触れた指

【Para Gentleman】

それが俺なんだってば。

居場所を与えるだけの存在って 辛いよ

キミが思うよりも ずっと

だけど俺は紳士だから

そう言って自分を信じこませるの

巧いでしょ

いままでそれでこれたんだから

でももう俺は ひび割れたビー玉

もう俺は 壊れてしまっよ

——キミを想いすぎて

俺が最も愛するもの、

擬似紳士。

（でもキミは、

それが・・・擬似紳士が嫌いらしい）

【君と私と触れた指】

気持ちすら、言葉遊び。

音と私と失くした道。

櫛と鏡と割れた爪。

影と草木と犬の声。

筆と白紙と甘い罖。

過去と桜と砂嵐。

君と未来と叶った夢

終焉

終焉

—— 或いは稚拙な言葉で形成される、愛。

何も見えない暗闇の中で

私は何処に向かうのか

永久に貴方の傍にと

そう思っていた日々は

突然の終焉を迎えるのか

いつかは笑顔になれる

そう私は信じてきた

それは目の前で崩された

貴方の色が消える

貴方の笑顔が消える

貴方の光が消える

それは私の灯火の終わりか

貴方の灯火の終わりか

いずれ悲しむのだろう

誰かの死を

その前に私が死ぬのか

涙さえない人生を変えた貴方を

私は離さない

（世界の終焉より

貴方を選ぶ私は

愚か者にもなれない）

1（モノ）と0（クロ）／尽くしませう、永久に

【1（モノ）と2（クロ）】

ぼくらの、そう遠くない未来に。

約束は もう何もない

全てを消して また イチ から

なんてね 全てを無に帰したら

ぼくの存在も ゼロ にしてしまうから

もう キミ は笑っていいんだ

右手に重ねた 世界 の姿は

ぼくには 笑わないから

代わりに キミ が笑ってよ

キミ に、

この サヨナラ が届くとき、

ぼくは、

(You never look back and show
me , please .)

【尽くませう、永久に】

尽くした先には何も無いのに。

貴方に尽くませう

この身の全てを捧げても

貴方に尽くませう

この声が枯れたとしても

貴方に尽くませう

この手が微動だにしくとも

貴方に尽くしませう

この足が動くことを拒もうとも

貴方に

尽くしませう、永久に

(I will administer to you)

L e F a n t o m e d e l O p e r a

花言葉、本当を映す鏡。

ラベンダーというイメージ

それを告げた口は

オレが欲していた彼女のもののなに

未だに遠くて。

——ラベンダー

花言葉 「不信」

ぴったりだと思った

花言葉なんて気付いてないのは知ってるけど

この人間不信をどうにかして欲しい、

なんて思ってるとは知らないでしょう？

誰も信じない人。

誰にも信じられない人。

それが、オレ。

オレにぴったりじゃないか。

「不信」という仮面を付けた、

キミの愛しいファントムに。

ねえ、キミも信じられないでしょ？

このオレのこと。

だから未だに

避け続ける。

(lavender を捧ぐ
from "Fantome")

愛を冠したラブソデー

嫌いと好きを繰り返して、
わたしはずっと深い場所へ。

貴方の笑顔の為ならと
どんなに遠くても飛んでいけたはずなのに、
今じゃ羽はよれていて
近場すらも届かない。

貴方は太陽に近いから、
わたしのみたいな拙い羽は
その熱で蛾が融けて
真っ逆様なんだよ。

好きだから傍に居るのが当たり前だと
勘違い野郎もいい加減にね。
大嫌いだから傍に居るのよ
最期を見届けるのはわたし。

最後の最後まで優しいフリして
最後の最後で裏切り行為、
「バイバイ」なんて可愛いものでしょ
「ざまあ見る」くらい言わせてよ。

それでも何故か貴方は嫌いになれないから、
貴方だけ攫って安全な土地へ。

「隣に居ないと嫌あよ」なんて
猫被りの甘い声。

うわ、寒気がする
鳥肌が立つ。

それならそうか、
貴方の白い首筋に光るものでもあてて
似合わないルージユで染めるのも悪くないかも。
我ながら狂愛じゃない？

失望に絶望を、
追い討ちかけて自我を見失わないようにして
だつてそのままの貴方が好き。
世界を敵に回しても譲れないわ。

嫌よ嫌よも好きのうち？
呆れた冷めたなら正解？
行く道を見失うならわたしは
これ以上付いていけないからね。

一度羽ばたかせた小鳥を
手製の弓で射落としてみせよう。
自由に絆され喜ぶその一瞬のちに
得たもの全て消えるから面白い。

わたしのこと嫌いになった？
正直見限ったんでしょ？
束縛依存そんな簡易な言葉で括るほど

わたしの愛は小さくない。

足元から沈むような感覚に
若干狼狽えたから腹いせに
貴方も道連れ、と
ちよっとおちゃらけて言ってみた。

その声は虚しく空間に落ちただけ。

嫌い嫌い、
だけど貴方は好きよ。

喉元に自慢の牙を突き立てて
貴方の愛ごと吸い込みたいくらいに。

見失う。

煩い 煩い。

頭がかち割れそうだ。

そんなこと言わなくても

自分が一番分かってるからさ、

何でそんなに僕を責めるの？

楽しい？

煩い 煩い。

今にも死んでしまいそうだ、

今にも死んでしまいたい。

僕の身体を八つ裂きにして、

そんなに可笑しいかい？

煩い 煩い。

どこまでも広がる闇をあんたは知らないだろう。

僕はもっと深くまで落とされて

深くまで堕ちていくから。

首締めて皮膚切り裂いた僕を見て
絶望を知ればいいよねえ。

煩い 煩い。

小蠅が僕の周りで唸っているよ。

邪魔だから退いておくれよ。

さもなくばお前を喰らって僕の道を
己の手で切り開いてやるぞ。

煩い 煩い。

頭の中が沸騰しそうだ。

苦しい 痛い。

届かない、 何処に？

頭の中の影が大きくなって、
僕をいよいよ飲み込むつもりみたいだ。

腕をバタバタ振り回しても
影はちつとも消えないしさ。

そんで飲み込まれて
はい 終了。

真白な肌に化粧を乗せて、
綺麗に着飾って最期を飾るんだね。

それを見た小蠅は雀よりも僅かな見えない涙を流して、
後悔すんだろ、 そうだろ？

冷たい部屋でうたた寝してる僕は
それをちらと横目で見てほくそ笑む。

今度は煩い小蠅じゃなくて、

冷たい静けさが耳をつん撃く。

それは心地良くて または ちょっとだけ怖いもの。

だけど今までに比べたらまだから、
僕は我慢してそこで冬眠するんだ。

とりあえず誰かが起こしに来るまで。

黒い背広を羽織った紳士が、
馬車から降りて優しく僕の手をとるまでは。

その後はきつと、馬車で飛ぶように空いた時間を埋めてから
必要とする人の元へ。

再び煩い場所へ、
再び笑う為に。

幽遠の輪

焦がれるまま一人
揺られ心震わせて
吐いた嘘の数を
一つ一つ数えてた

痕を付けて
過去を選んだ
許されぬと知っていても
唇から零れてく
言の葉拾う

私だけの貴方の傍
それを信じて生きてきたの
なのにどうして彩^{さい}を残し
私の目には映らなくなつた
今でも私は未練で着飾るわ

夕音の色を分けて
「帰らなきゃ」と言うは
どちらの寂しさでしょう？
ゆるりと解^{ほど}く指先

「雨が降るから
傘を持ってて」
差し出したそれを掴んで
叶うか先は見えない

「またね」を伝えた

私だけに見せた涙
拭えるのはこの指だけよ
なのにどうして貴方の頬に
触れるその指は私のじゃないの？
今ならこの身が焼かれてもいいわ

贈る物には

最後の嫉妬

添えて飾った奇跡

別れの挨拶の代わり

「幽遠の指輪」

言葉の無い恋愛をした

私の手に残った痕から

咲いた花はいつの日かきつと

優艶な花を描くことでしよう

傍に寄って冷たさに触れる

銀の縁から伝わる体温

もう二度とは分らないのだと

肯いてから立ち上がって歩くわ

「雨が降る前には帰ろうと思うの。
だから貴方も早くお帰りなさい」

幽遠の輪（後書き）

なんとなく歌詞になってしまいました・・・

冬より春が好きなんです

最後にその手を離したのはいつだろう。

遠い記憶の彼方に

その手の温もりがあつた。

最後にその声を聞いたのはいつだろう。

遠い記憶の彼方に

その声の優しさがあつた。

最後にその笑みを見たのはいつだろう。

遠い記憶の彼方に

その笑みの心があつた。

触れ合つて

触れ合わなくて

それで温もりを通わした。

そんな日々は今日から数えて幾つになるか？

掴み損ねたシャツの裾は

綺麗に君に着られてる。

君が好きと言つた季節とおんなじ季節だよ。

僕が好きと言つた季節とおんなじ季節だよ。

それでも桜は散つていくんだ。

寂しいよ、今まであつた隣が無いと。

寂しいね、もうその定位置は無いの。
そこの空いたスペースは僕のものなのに。

新しい世界に踏み出すはずが
僕たちはとんでもない世界に行ってしまったようだ。
過去へと遡っていくばかり。

声や笑い方すら忘れてしまつて
似てるようで全く違う僕らには
今や何が残されたのだろう。

せめて移つてしまつた癖の一つくらい
この身に染み付いて離れないで
君とを結ぶ架け橋になればいいのに。

君に感化された絵文字が、
どれだけ君と一緒に居たかを物語るから
メールすら辛いよ。

手を伸ばしても掴めない友情も愛情も
果たして僕たちは欲していただろうか、
いやただの日常が欲しかつただけなのにね。

一人で良いと強がつた挙げ句の果てには
やっぱり淋しいと駄々をこねる。
子供みたいでしょう？

今まで余裕ぶっていたの。

大人のように振る舞って、
それが当たり前だと思ってた。

そして僕たちは子供らしさを
いつの間にか何処へやら
捨てていつちやっただ。

その時に大事なものも全て捨てた。
僕は君を、君は僕を
それぞれ犠牲にしてきたんだ。

でも見てごらんよ、
僕たちの季節が来たから
僕たちのことを思い出そう。

何も無かったかのように
寒々しい冬なんて来なかったように
再び桜は咲き誇るのだから。

エゴ

自己愛

と

狂愛

わたくしはあなたに愛される為に
こうして生きているではありません

意味もなく 真つ暗闇の中
ただ見えない水掻きで 濁った海水を
脇へ脇へと押し流し 掻き分けながら
絶望を知らないようにしているのです

あなたに愛されたいが故の行動では
あまりに幼稚で拙い行動でしょう

帰り道すら分からないわたくしを
あなたはハナビラを置いて 何処までも示してくれる
それを頼りにするばかりでは
もう駄目だと とうの昔に悟っているのです

つまらぬ妄想に悩まされて
これ以上生を狂わせるのはおよしなさい

手足のもぎ取られた豹でも
翼を焼かれた鷹でも
平衡感覚の狂った猫でも無い

あなたはあらよと自由になるのです

わたくしのお遊びは楽しいですか
わたくしはちつとも楽しくありませんわ

記憶をなくしたような方に

情けをかけるような性格ではありませんもの
それならばあなたはこれから
どうなさるおつもりなのかしら

少しだけ聞いてもいいかしら

そうしたら　すぐに楽にして差し上げる

ぼたり　と落ちる雫を目にすれば

あなたは　これは何　と聞くのでしょう
点滴の中身は教えませんわ
わたくしと神さまの約束ですもの

それでは　目を瞑り後ろを向いて
ほんの僅かな痛みは無視して下さい

ほら　もう終わりましたよ

わたくしとあなたは晴れて無関係

何処までもお行きなさい　空の果てまで

あなたにはわたくしにはない　虹色の翼があるのです

寂しくなんかありませんわ

どうしてわたくしが寂しく思わなければいけないの

わたくしはあなたに愛される為に
こうして生きているではありません

わたくしは自分が大切なのです

わたくしは自分に正直でいたいのです

わたくしはあなたに幸せに生きていただくために
自分を捨てることすら 厭わないのです

汚い自己愛と 綺麗な自己犠牲

わたくしのエゴの行使の為に あなたなのですから

(嘘、

本当はあなたに愛していて欲しいだけ)

未遂

薬飲んで、

自己暗示かけて、

「朝が来ませんように」と

空の力ナタへ願いをかける。

だけどやっぱり

ただ朝は巡る。

巡るために在るから。

薬飲んで、

ああ胸が痛いなあつて、

だけでもつと苦しまなきゃ

未来は捨てられないんだと

少しだけがっかりして、

言い聞かせて。

息が浅くなつて、

体がふわつとして、

いつの間にか眠っていた。

夢を見たよ。

どんなのか忘れちゃったけど

なんとなく、起きなきゃって

思わされた気がするんだ。

あれは友達ミンナだったのかな。

もしかしてお節介で

助けられちゃった？

懐かしいような
不思議な風の匂いに
今なら全て投げ出せると
そう思えたんだけど。
やっぱり朝は来た。
いつもと変わらぬ平和な朝が。

今日も薬飲んで、
ちらつく不安を追いやって、
「明日が来ませんように」って
願うんだ。
だけど際に見た幻の笑顔に、
ほっとする。

未遂（後書き）

GW中に自殺未遂。
でも死ねなかった。

多分、本気で死ぬ気もなかった。
でも、生きていたくないのもホントウ。

白紙色。

白紙の用紙に云いたいこと、云えないこと、つらつら並べて見損ねた人々を必死に避けて。

あーもう嫌いやねん、自分。

その「自分」は、「わたし」？それとも「あなた」？

ワケのわからぬ見世物に戸惑いながら、数時間後の幸せに浸る。ほんとは今スグここを飛び出したいよ。

見えない羽でも広げて、「さよならや」って。

キミの手に縋るために、こんな稚拙なトコは抜け出して。

見えない文字は、私のものじゃない。こんなに汚く書かれへん。そんな読めないような字で、何度「嫌い」を重ねるの。

だから嫌いやねんて。もうこれ以上は。

砂の上にやたらと文字書き。それはすぐに波に攫われるけど。だから意味分からへんて。

イライラするのをとめられずに、今日来なきゃよかったって。

その蚯蚓の這ったような字のある紙をぐしゃぐしゃにしたくなる。
・・・・・・意味、分からへん。

慣れなかったはずの標準語に慣れてしまったから、

「意味分かんない」って人の中で呟いた。

知らない知らない、友達なんていない。

周りの人は、只のヒト。あ、他人って云うんだっけ。

なんでか慣れて落ち着いてしまった言語に埋もれるうちに、自分自身を見失ってしまったようだよ。

云いたかったことはそれだけ？

「長文乱文すみません」って誰に対してもなく付け加え。

何が言いたかったかなんて、分かるわけ、ないやろ。

残ったのは眩暈だけ。あと、イラつき。
こっしたの意味ないじゃん、
・・・・・・・・やる？

鉄箱と猫髭

走るように空を自由に動く雲。

切れ間からこの天気に対応しくなくらいの青空が覗いている。

黒、灰色、白、青。

まるでたれかの心みたい。私には解らぬ心。

一秒どれだけの速さで旅をしているのだろうか。今見た雲は、すぐ見えなくなる。

幼かった頃、親に「あれはコレに似ているよ」と言うのが楽しみだった。

……お父さん、あれ何に見える？

……お母さん、あれは何の後ろ姿だね。

ああだこうだ、と笑い合う。空には不思議な魔力があると信じていた。

いつの間にか形の崩れた雲に、無常というものは微かに感じていた。

幼き心にも、情緒を解する心を持ち合わせていたはずだと今も思う。

不自然な天気と空気に、見えない猫のヒゲがピリピリしたものだ。

手を翳して風を感じれば、すぐ雨はそこ。だから傘を忘れないようにしなきゃ。

外に立って、今ドキのような短いスカートが風に靡いて捲れるのを手で抑えながら思った。

一瞬晴れて光が差す。私は眩しさに耐えきれず目をそらした。

人の心のようにすぐ変わり行く空模様に、嫌いとも好きとも一概には言えない感情が過ぎった。

そしてまた陰る、晴れる、陰るを繰り返す。

動く鉄箱の中でもまだ、私は空を見上げていた。鉄の中なら雷は襲って来れないと安心しながら。

e v e r l a s t i n g c o n c e r n

耳を軽く劈く。^{うずく}

両耳を押さえても痛みは消えない。

音が徐々に歪んでいく。

籠った音が嫌いになる。

いつそ無音の世界へ。

目を軽く刺す。

目を閉じれば深い海へ沈む。

視界が徐々に歪んでいく。

二重の物体が嫌いになる。

いつそ真暗の世界へ。

手は何も掴めずに、掴めたはずの物さえ落とす。

力はもう入らない、それは体が枷で留められてるから？

この両手から現在^{いま}が零れる度に、

恐怖と諦めが押し寄せる。

ニヒルな笑い。

欠けた何かに共鳴していた。

だけどソレはどこにもないらしい。

走り回れる今まで行けるところまで行ってみた。

それでもやはり見つからなかった。

今じゃビビッドな寝具の上で、望郷の念を抱くしかできないらしい。

一歩たりとも動けない鳥籠で、はて、

何を求めればいいだろう。

少し差す日の光と、少し見える空と木々にシャッターを切る。

急加速した沈む速度。

嘔気より鈍痛の方が辛いかも。

でも何も言えずに身体は泡となってしまう。

口すら聞けなくなつたようだ。

ぼっかり空いた島のような二つの席と、

いずれ空くだろう、飛び石の席。

それらに挟まれた人はどう思うだろうか？

添えられた花の色はナニイロか見えない。

もう何イロかミエナイ。

H e o r S h e p r e s u m e s o n m e .

e v e r l a s t i n g c o n c e r n (後書き)

* e v e r l a s t i n g c o n c e r n : 永遠の懸念

PIERROT 1

【PIERROT】

ねえ、ねえ、

死にたがりのピエロの味って、
どんなのだろうね。

赤くて、 トマトジュースみたい？

黒くて、 イカスミみたい？

・・・・・・ 例えが少しオカシイね。

赤い血なら美味しそうだけど、

黒い血なら、僕、食べられないよ。

夢にピエロが出てきたよ。

そこでは僕は、必要とされてたみたい。

色んな人がいたんだよ。 勿論キミも居たよ。

一緒に手をつないで、みんなのあとをついていったんだ。

そしたらね、僕——シンチャッタ。

【WRIST CUTTER】

ねえ、ねえ、

やっぱり僕はイケナイ子？

泣き虫な僕は嫌い？

だってね、皆僕がイラナイの。

ちゃんとして知ってるんだよ。

キミもね、嫌いでしょう？

でも、僕に何かあったときに
すぐ来てくれるのはキミだけだから。
だからね、キミを繋ぎ止めたくて。
自分の手首を、切るの。

痛いのは嫌いなのにね、僕。

そしたらキミが手当てしてくれる。

病院はやだよ、キミじゃなきゃ治らない。

病院はやだよ、キミと離れちゃう。

ねえ、ねえ、聞いてる？

ねえ、ねえ、

どうすればキミに好かれるのかな。

一度でいいから「スキ」を下さい。

月に願っても無駄だから、

今宵も僕の血で染め上げる。

手首と同じ、赤色に。

只の振り返り

後姿を見た

少しも変わってないそれに

私は胸を撫で下ろした

年月が過ぎて色あせて

この身に何の癖も残らなくなったら

忘れてしまうのだろうか、その日々を

隣で笑っていた人も

たったこの短い期間でどれだけ

ぐるぐるとかわってきていることだろう

私は少し怖くなった

このまま何もせぬままで

”永久の別れ”にもなるのだろうか

それを避けたいと願いつつも

私は横をただ擦り抜けていった

例えば今隣の人が私を

呼んで近くに行つたとしたら

目を見て笑ってくれるだろうか

それでも私は何もしない

何も出来ずに過ぎていく

只の振り返り（後書き）

今日はちゃんと話せた

目を見て笑えた、笑ってくれた

やっぱり好きなのだと思う

変わってないな

いつまでもあのままでいたかったよ

嫌い

流れすぎる時間に

「まあいいや」で全て終わらせた

胸の痛みも無視して

やりたいコトやりたくないコト

何でもかんでも投げ捨ててみた

だって夢すら何もないもの

だからムリして生きる必要もない

今すぐ溶けて沈んで弾けてしまえ

そうすればこんなに悩むこともない

アツチ と ソツチ と究極の選択

私はどちらを選べない

第三の選択肢作って

「どっちもえらばない」っていう嬉しいものを

うるさい存在に引きつった笑い

もう上手く笑うことも笑かすことも出来ない

交わし方も分からないから

ごく簡単にスルーの方向でいいよね？

ちよつと変な表情になったので

「イイ気味だ」って心の中で嘲笑う

そいつ嫌いだもの。なんてね

誰何

喉の奥で何かが叫んでいた
美しい、聞きほれるような声で
だけどそれは霞んでしまった
まるでどこかへ連れ去られてしまうかのように
徐々に、徐々に

見慣れた景色に見慣れない文字を見た
信じられない光景が私を包む
いつか叶えてみせるから、と
誰かが誓ったその思いを
無下にしてしまうようだ

鬼のように危険で美しくて
そんな幻想を孕む魔術
私の右手にはその闇が宿り
左手にはそれを打ち消す光があつた
両方を駆使して生み出した音は
天高くまで駆け上るだろうか

「もしも」を遮って誰かに尋ねた問いは
今は叶えずにいてもいいのかもしれない
傍に居られたらという言葉が
どの人から漏れたとしても私には関係無い
もう少し、ここで踏ん張ればきつと
あの場所に届くようになるだろうか

己を犠牲にして得た誰かの幸せはどこまでも

虹の色に溶けていく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4490q/>

Big Sky High

2011年8月29日17時20分発行